



秋の目玉

福田清人



秋の目玉

福田清人



講談社

秋の目玉
福田清人

講談社 昭和42年

200p 21.5cm



みなさん、お読みになった感想を
お知らせください。このあと、どう
お知らせください。このあと、どう
みなさん、お読みになった感想を

行所 株式会社 講談社 電話・東京 (942) 振替・東京 三九三〇番 (一〇二二大代表)	東京都文京区音羽二一―二一二	慶昌堂印刷株式会社 磨田照雄	野間省一	福田清人	昭和四十一年七月十日 第一刷 発行 昭和四十二年六月二十三日 第六刷 発行	定価 四五〇円	(製本 黒柳製本株式会社)
	〓 講談社 一九六六年						

春の目玉には春の色、
秋の目玉には秋のすがた、
すべてのものをよく見つめて、
深く考へ、君の心のかたとしへ
ぐんぐんとのびて行こう。

福田清人

もくじ

第一章 花さく春

さくら並み木 | 6

通学^{つうがく}の道 | 14

応援^{おうえん}の歌^{うた} | 21

「二百二高地^{こうち}」 | 25

地獄^{じごく}段^{だん} | 32

第二章 セーラー服^{ふく}の少女^{しょうじょ}

ボートの日 | 47

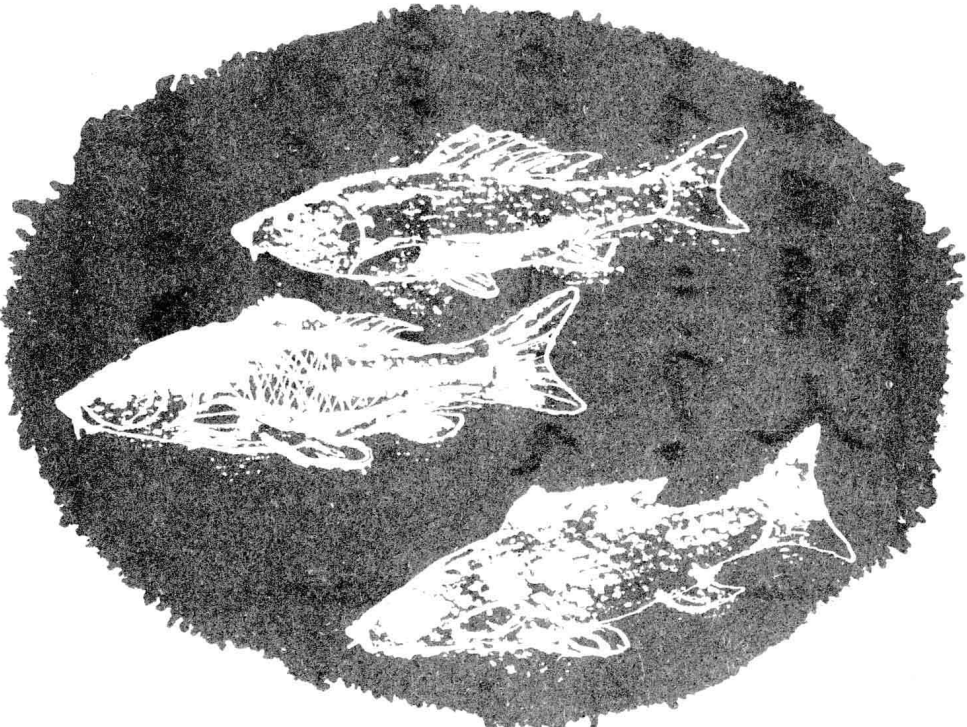
無言^{むごん}のバス | 54

美しい池^{うみいけ} | 59

水泳^{すいえい}の日 | 66

島の遠泳^{えんえい} | 75

第三章 秋風^{あきかぜ}のころ



ほめられた作文きくぶん

せり売りせりうり

全校マラソンぜんこう

寒げいこかん

第四章だいしやう

寄宿舎ぐらしきしゆくしや

新しいえり章あたらしいあき

夜ざくら見物よざくらけんぶつ

ふうがわりな転校生ふうがわりなてんこうせい

第五章だいご

島の探検しまのたんけん

いたずら

郷土の歴史きやうとのれきし

ゆめの少年使節ゆめのしょうねんしせつ

ほらあなとへび

86

91

99

106

110

118

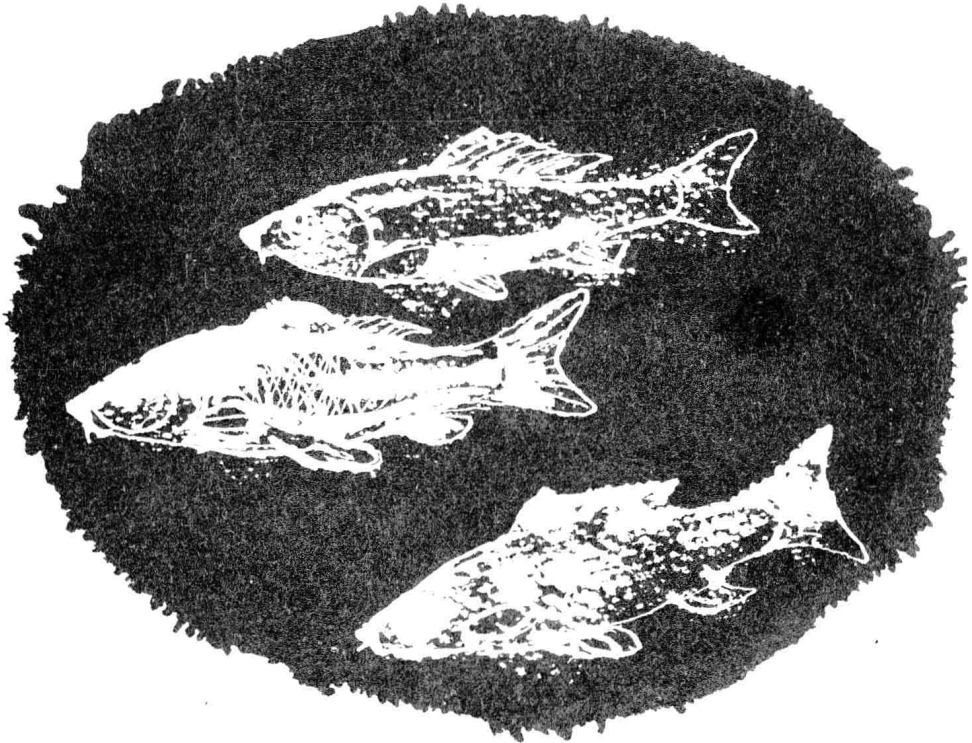
127

136

141

148

152



あこがれの花

160

花ことば

168

第六章

金色の光に

小さい詩

179

はげましのことば

184

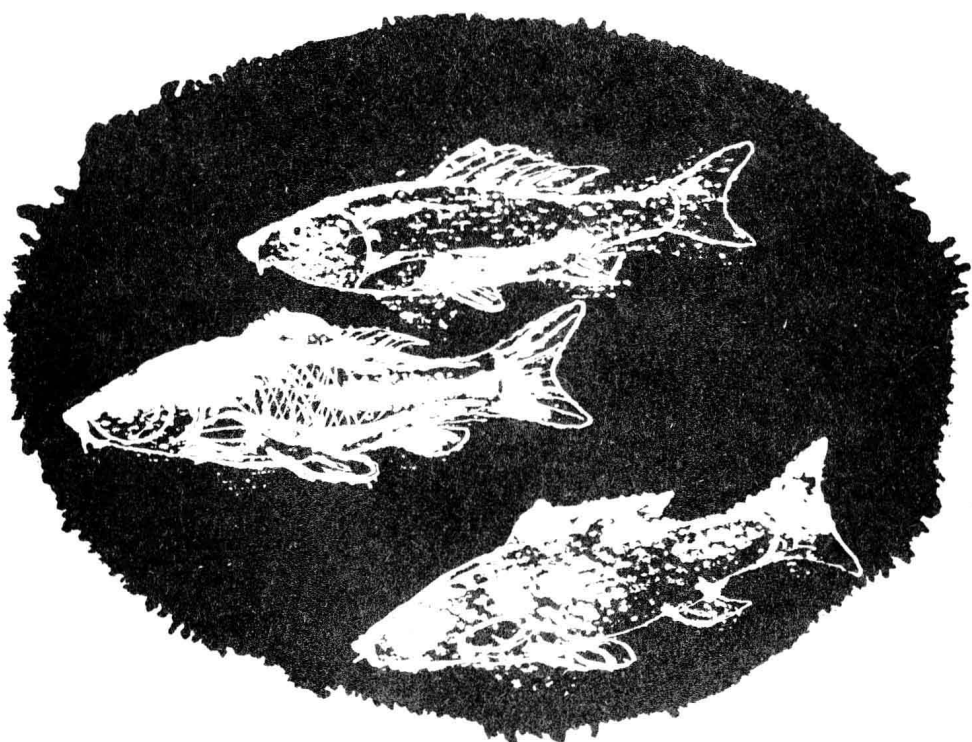
わかい合唱

189

あとがき

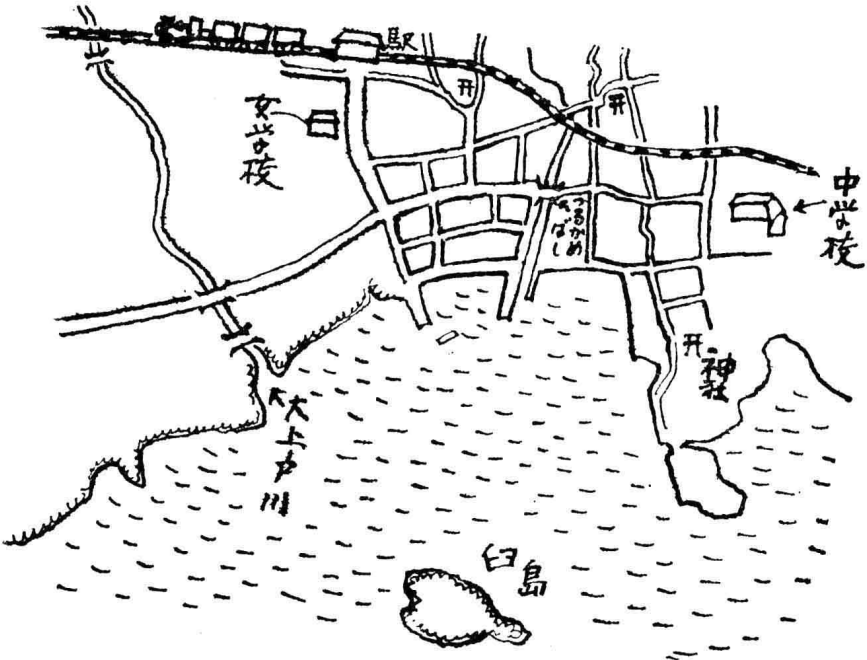
196

さ	装
し	レイ
え	アウト
太	本
田	杉
大	田
八	豊





秋の目玉



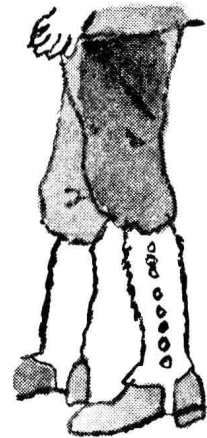
第一章 花さく春

さくら並み木

田口草夫が大きな石のとりいをくぐると、参道の両がわは、青草でおおわれたひくい土手になっていて、その上にさくらの並み木がつづいている。

その枝々も見えないほど、いっぱいうすべに色の花をつけていて、もうちらちらと花びらをちらしているものもあった。それが草夫のかたにもちつてくる。

四列にたての隊をつくった中学生の長い列が、先頭でぶきならすらっぱの音に、ザックザックと歩調をあわせて、この花のトンネルのあいだを行進していた。



田口草夫もこの行列の先頭のほうにいた。草夫のからだはみんな新しいもので光っている。新しい制帽の記章も金色に光っている。こんのにおいのする制服のむねの金ボタンも、Iのえり章も光っている。ズボンにまいたまっ白いゲートルの白、貝のボタンもその下のくつも光っている。

それらはまだ草夫のからだにじっくりあわない気がする。新しい制帽・制服・くつの中に、むりにからだかもぐりこんだようだ。

しかし、草夫は大きく両手をうちふり、まえや左右の同級生に歩調をあわせていた。ところが、それがときどきまごつくことがあった。それは右わきにいる少年が、いっこ

うに歩調をらつぱにもあわせようとせず、手も大きくふらず、ときどき上着のポケットにつっこんだりするからである。

「おぬしは、どこの学校からきたか。」

行列が第二のとりいにかかろうとするとき、その少年が草夫にはなしかけてきた。「おぬし」とはおまえとおなじ意味の、この土地のことばである。

「行進中はしゃべってはならぬ。」

と、この神社参拝のまえに、校庭でならんだとき体操の先生から強く注意されたのであった。それで草夫はきこえぬふりをしていった。

「おい、おぬしは、つんぼか。どこの学校からこの中学へはいったか、きいているのだよ。」

こんどは、まわりの数人の同級生たちが、思わず、その声のぬしのほうに視線を走らせるほどのするどい声でといかけた。

草夫はじぶんがとがめられたように、顔を赤くして、ひ

くい声でへんじした。

「山首だ。」

「ああ、島のものか。あばらばねが一本たらん組か。」

その少年——あとで北村太郎という名であることを知った——が、ちょっとからかいぎみにいった。そして、その声のとどくまわりのものから、ひくいわらい声がおこった。そのわらい声は、入学そうそうでなかったなら、もっと大きくおこったであろう。まだ中学の入学式がおわって五日め、さきほどの体操の先生の注意も、つつしみぶかく耳にいれておく気持ちも、みなにのこっていた。それでそのわらい声もおさえつけてひくいものにかえたのである。

草夫は、北村のことばが、どういうことを意味しているのか、よく理解できなかった。しかし、その語気とまわりの少年たちがわらったことから、あきらかに、けいべつの意味をふくんでいることはわかった。

また、そのおり、あらためて北村を注意してみると、帽子も服も新しくなく、その顔も、そのせい、ことし

じぶんといっしょにこの中学にはいったものより、ひどく
ませて見えた。

——きつと落第生だな。

そう思いつくと、さっきからの手のふりかた、歩調のと
りかたのなげやりなもの、それとむすびついて、うなずけ
るところがあった。事実、北村太郎は落第生であつたので
ある。

また「島のもものは、あばらぼねが一本たらん」というこ
とばも、この小さい九島の城下町のもの、入り海一つへ
だてた園木半島の人たちを、けいべつ的に見ていうことは
であることを、あとで草夫は知つたのである。

明治維新のまえ、半島は、この城下町に城をきずいてい
たとのさまの支配地であつた。山がおおく、耕地はすくな
く、半農半漁のますしい半島の人たちのくらしであつたが、
それはいわばこの城のある町の植民地のようなものであつ
た。ちやうど、本国の人が植民地の人民をかるく見るよう
に、城下町の人も半島の人をかるく見て、あばらぼねが一

本たりない人間というのであつた。草夫は、その一つむこ
うの小さなみさきにそだつたが、北村は半島生まれとおな
じものに見てしまつたのである。

さて、行列は、城壁のあいだにすすんでいった。天守閣
などみなこわされてしまつて、いまは弧をえがいたように
そりかえつた城の石がきがのこつてゐる。かつて熊本城
をきずいたあと、加藤清正が設計したとつたえられる小さ
い城のあとである。石段をのぼつていくと、そのおくに、
神社がある。この土地を支配したとのさまをまつている
という神社だ。

神社の境内にモーニングをきた銅像がたつてゐる。これ
がまた神社にまつられてゐるとのさまとすることである。

草夫は、とのさまとこというからには、ちよんまげで刀をさし
ている人かと思つたら、洋服すがたとはしっくりしない。

しかし、それは明治維新になつて、ちよんまげをきり、
刀をすてたあとのようすといふことだ。

県立の中学生が、なぜとのさまをまつつた神社におまい



りするの。それはいまの中学のもとが、とのさまのたて藩の学校であった、それがのちに大きくなって県立の学校にうつされた、いわばそだての親であるからだそうだ。

もつとも、一年生にはいったばかりの草夫は、うれしくて、だれをまつつていようと、学校でそこにおまいりするといえは、よろこんでかけたのである。

こうして、玉じやりをしきつめた本殿のまえをうずめるようにして、中学生はならんだ。

先頭を行進してきた草夫たち一年生は、いちばん前列である。

白いしょうぞくで、えほしをかぶった神主さんが社殿のまえにあらわれた。そして、うやうやしくぬさを左右にうちふっている。

黒いつめえりの洋服をきた、まったく西郷隆盛に似た体操の先生が、ひとりの神主のドドン、ドンとうちならすた

いこがとどろきだすのをあいずに、

「最敬礼」

と、号令をかけた。

このたいこは、なかなかなりやまぬ。最後は、ドロドロとひくくとどろきつづけた。

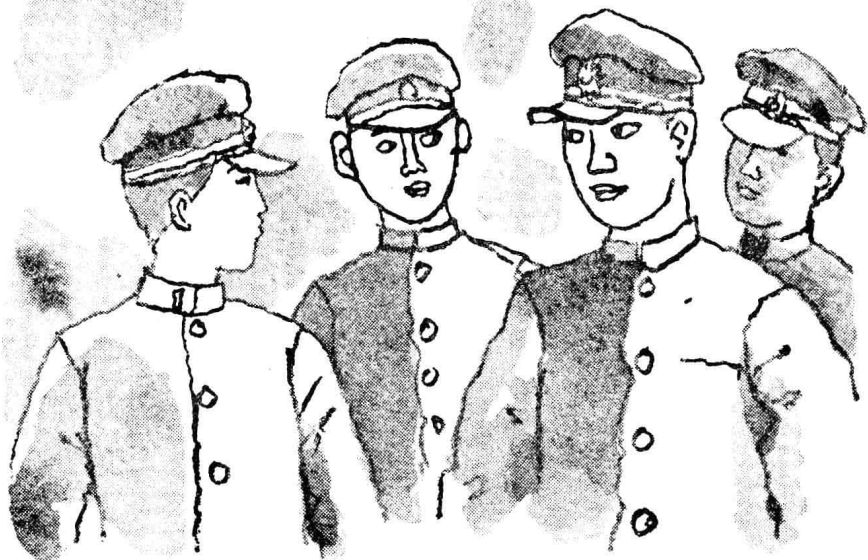
「おぼけだぞ。」

うめくような声は、草夫のよこのさっきの北村太郎である。

と、くすくすわらいがまわりからおこった。くすくすわらいも、あわせると加速度のように大きくなる。北村の聲がきこえぬあたりも、このドロドロの音の連想するしばいでゆうれいのあらわれる場面が了解されて、わらいはますますひろがり、しまいには、たいこの音と合奏するように大きくひろがっていった。

草夫は、なお最敬礼をつづけていたが、いつか制しようとしても制しきれないわらいで、かたがうごくのをおさえつけようとくるしんだ。

ようやくドロドロドロがやんで頭をあげると、体操の先生が、熊本城がなかなかおちないときの西郷さんもこうで



あったかと思われる顔で、わらいのおこった中心——草夫のあたりをにらみつけていた。

草夫は、こまった同級生が、じぶんのそばにきたものだと思ういっぽう、じぶんのできそうにない、またいえそうにないことをやったり、いったりするものがあることに、興味がないこともなかった。

神社参拜がおおると、そこで解散となった。草夫は、そのままかえろうかと思ったが、

「おもしろいところを案内してやる。ついてこい。」

と、北村太郎が、草夫や、じぶんのそばの三、四人に命令的にいった。

草夫は、入学したばかりで、まだしたい友だちもできていなかった。太郎について歩くと、なにかわるいなかまにひきずりこまれそうな気もしないではなかったが、まわりの三人も、

「いこう。」

というので、ついていくことにした。

太郎は、神社のうら手のひくいやぶの中の細い道をすすんだ。やがて、青い竹林があった。そのそばにいくると、たちどまって、

「だれか、ナイフは持たんか。」

といった。草夫はぎくりとした。太郎は思ったより不良で、ナイフでおどし、なにかさせるのではないかと思つたのである。ついていったものも草夫と似た気持ちだったか、中には顔色をかえたものもいた。

「だれも持たんか。それなら、ぼうしの記章でやろう。」

太郎は、かれのだけ古いぼうしをぬいで、記章のところをにぎった。記章は、中央が円形で、中の字がうきだしてあるが、その円形から朝日のように線がながれ、さきがとがっていた。

「入学記念に、このたけのみきになにか字をかいておけ。」

あとまでのこるぞ。」

そういって、太郎は、

「第二回めの一年生、北村太郎。」

としるし、四月七日とその日づけをきざみつけた。

たけのみきにはただ青い線の文字がきざまれただけだった。

草夫といっしょの連中も、そんなことだったかと、ほつとしたように、じぶんの名まえを太郎にまねて、新しい記章のとがった部分で、たけにきざみつけていた。草夫もそれにならつた。

「おや、一年生のくせにもうやっているのか。」

バサバサ音がして、かたをいからせた上級生が五、六人あらわれた。

太郎は、あわてたように、ぺこりと頭をさげた。

「北村、新入生にわるいことをおしえるなよ。」

「はい。」

太郎は、またぺこべこ頭をさげたあと、一刻も早く上級生のそばをはなれたいらしく、

「いこう。」

と、草夫たちをうながして、そこをはなれた。草夫は、い

く本^{ほん}本のたけのみきに、以前^{いぜん}おなじようなことをやったあ
とが、いまは白^{しろ}い線^{せん}となつて、いっばいのこつているのを
見た。

名^なまえのほか、なにかもんくをきざんであるのもあるよ
うだ。草^{くさ}夫^ぶがそれをよもうとすると、

「田^た口^{くち}、早くこい。」

と、太^た郎^{ろう}がたしなめるようにいつたので、そこにちかよる
ことをやめた。そして、足^{あし}早^{はや}にやぶの外^{ぐわい}にでる太^た郎^{ろう}にした
がつた。

まもなくひくいおかがあり、その下^{した}はからぼりになつ
て、しだなどが青^{あお}々としげっていた。

「二百^{にひゃく}三^{さん}高^{こう}地^ちだよ。」

「二百^{にひゃく}三^{さん}高^{こう}地^ち?」

「むかし、日^{にち}露^{ろう}戦^{せん}争^{そう}で激^{げき}戦^{せん}のあつたところの名^なじやない
か。それを知らないのか。」

太^た郎^{ろう}はとくいそうにいつた。

草^{くさ}夫^ぶたちが、みよ^{みよ}うな顔^{かほ}をしていると、

「たかもりどんがつけた名^なだよ。」

「たかもりどん?」

「あ、おまえたちは、まだたかもりどんがだれたか、知^し
らないんだな。あ^あの号^{ごう}令^{れい}をかけた体^{たい}操^{そう}の先^{せん}生^{せい}だよ。西^{さい}郷^{きやう}さ
んににているだろう。西^{さい}郷^{きやう}さんとおなじ鹿^か兒^ご島^{しま}の生^うまれ
で、日^{にち}露^{ろう}戦^{せん}争^{そう}に軍^{ぐん}曹^{そう}でいつたそうだよ。そのうち、おまえ
たちも、ここできたえられるぞ。のぼつてみよう。」

おかの斜^{しゃ}面^{めん}は、はげしい傾^{けい}斜^{しゃ}になつていて、ところどこ
ろにのこつているきりかぶを、手^てがかり足^{あし}がかりにしない
と、のぼれなかつた。太^た郎^{ろう}は先^{せん}頭^{とう}になつて、たくみにの
ぼつていつた。

草^{くさ}夫^ぶたちもどうやら、のぼりつくと、大^{たい}木^{ぼく}のみきとみき
のあいだから、九^{しゅう}島^{しま}湾^{わん}の青^{あお}い色^{いろ}が光^{ひかり}つて見^みえた。この城^{しろ}あ
とは、小^こさなみさきとなつて湾^{わん}につきでているのである。

太^た郎^{ろう}はそこから、石^{いし}段^{だん}をくだつて海^{うみ}べにみなをひきいて
いつた。石^{いし}段^{だん}は両^{りやう}がわにかしの大^{たい}木^{ぼく}ががぶさつて、うすぐ
らかつた。花^{はな}見^み客^{きゃく}はいんきなこのへんまで足^{あし}をのぼさな

いので、人かげもなかった。

「この石段は四十七あるので、名をいろは段というんだよ。しかし中学生は地獄段といっている。」

「地獄段？ どうして。」

見山という少年がきいた。

「だんだんわかるよ。」

太郎はにやりとぶきみにわらった。

こうして草夫は、北村太郎や見山などと知りあうようになった。また、神社のある九島崎というみさきの地理のいくらかをおぼえることができた。

通学 の 道

中学には寄宿舎もあったが、草夫は瀬川のおばさんの家
に下宿させられていた。おなじ親類のおじのいなか絵かき
の稲葉さんの家も、草夫の両親は下宿さきに考えていたよ
うだったが、中学からすこしとおすぎるし、それにてきと

うなへやもあいていなかった。

瀬川のおばさんの主人は、草夫の父のおじにあたる人
だったが、早くなくなったので、おばさんは小さな雑貨店
をひらいてくらしていた。父のいとこにあたる登さんは、
東京の大学で勉強していて、おばさんは登さんの妹のお
しずさんとふたりぐらし。二階に、登さんの中学時代の勉
強べやがあいていた。

夫を早くなくて女手ひとつで登さんを大学まで勉強さ
せ、おしずさんに女学校を卒業させたおばさんは、なかな
かのしつかりものにちがいがなかった。

草夫の家のものもここにあずけておけば、まちがいなか
ろうということからであった。

稲葉さんの家よりは、中学にちかいといっても、瀬川の
おばさんの家から中学まで、五キロぐらいあった。

草夫の足ではひどくとおい感じであった。松並み木のつ
づいている街道を、一キロほどすすむと、ようやく城下町
にはいる。そのさかいに大上戸川がながれ、その川の名を